

執筆 者 紹 介 (掲載順)

豊島重之(としま・しげゆき)

一九四六年八戸生まれ・在住。モレキュラーシ
アター演出家。ICANOFキュレーター。精神科
医。主な演出作品に『HO PRIMER』『TADORI』
『OHIO/CATASTROPHE』『DECOY』。主な論稿
に「写真という島々／証言という無人島」「飛び地
の写真／写真の飛び島」「写真は密航する」(いず
れも『photographers' gallery press』掲載)。編著に
『PANTANAL2006』『STHMUS2007』『68-72*世界
革命*展2008』。二〇〇八年十一月に月島「テ
ンポラリー」で『ILLUMIOLE ILLUCIOLE』公演を
予定。

米内安芸(よない・あき)

八戸生まれ・在住。写真家。ICANOF代表。二〇〇
一年第一回展以来、全展に出品・写真集収録。二〇
〇八年「68-72* TOKYO 月面着陸」展示。本誌の
ために同展の展示風景を撮影。

比嘉豊光(ひが・とよみつ)

一九五〇年沖繩読谷生まれ・在住。写真家。琉球弧
を記録する会。二〇〇七年那覇市民ギャラリーで北
島敬三らと共に「写真0年 沖繩」展を企画・展示。
『わったー(鳥クトッパで語る戦世)684』他写
真集・個展多数。

月館敏栄(つきだて・としえい)

一九五一年三戸生まれ・八戸在住。建築家。八戸工
業大学工学部建築工学科教授。ICANOFメンバー。
二〇〇一年第一回展写真集に「ペー族」、第三回展
写真集に「イヴァン族」の建築フィールドワーク写
真・テキストを収録。

倉石信乃(くらいし・しの)

一九六三年長野生まれ。写真史・近現代の美術批
評。明治大学大学院理工学研究科准教授。著書『反
写真論』(河出書房新社)。共著『モード写真の展開』
(有隣堂)、『明るい窓 風景表現の近代』(大修館書
店)他。二〇〇八年ICANOF展で、須山悠里との
共作で映像作品に初挑戦。

北島敬三(きたじま・けいぞう)

一九五四年長野生まれ。写真家。一九八三年木村
伊兵衛賞、二〇〇七年伊奈信実賞、自主運営ギャ
ラリー「photographers' gallery」を拠点として写真
批評誌「photographers' gallery press」刊行と共に
『PORTRAITS』『PLACES』シリーズを制作中。写
真集・個展多数。

平倉圭(ひらくら・けい)

一九七七年横浜生まれ。美術家。美術・映画理論。
東京大学UTC P 特任研究員。小林康夫編『美術史
の7つの顔』(未来社)所収の「ベラスケスと顔の
先触れ」「斬首、テンプル、反・光学」他、論稿多数。

唐十郎(から・じゅうろう)

一九四〇年東京生まれ。俳優・劇作家・演出家。

六三年劇団状況劇場を旗揚げ。六七年、新宿花園
神社に初めて紅テントを建て、『腰巻お仙』を上演。
六九年『少女仮面』で岸田國士戯曲賞受賞。八七
年唐組を結成、八八年『さすらいのジェニー』上
演。現在までほぼ年二回のペースで新作上演を続け
る。第四二回公演『ジャガーの眼・2008』を
二〇〇八年一月に吉祥寺・井の頭公園と雑司ヶ
谷・鬼子母神で行う。

津村喬(つむら・たかし)

一九四八年東京生まれ。気功師。早稲田大学第一文
学部(中退)在学中より文筆活動を開始。一九六四
年に初訪中、氣功と太極拳にふれる。同時に南京大
虐殺をはじめ日本軍のしてきたことにふれる。六七
年全盛期の紅衛兵と交流。著書に『魂にふれる革
命』(ライン出版)、『われらの内なる差別』(三一
書房)、『戦略とスタイル』(田畑書店)などから
『神戸難民日誌』(岩波書店)、『歌いながらの革命』
(100出版局)、『氣功への道』(創元社)、『疲労回
復の本』(同朋舎)など多数。

佐伯隆幸(さえぎ・りゅうこう)

一九四一年広島生まれ。演劇評論家。学習院大学フ
ランス語圏文化学教授。演劇センター68/71創立
に参加し、舞台制作を担当。学習院大学大学院に身
体表象文化学専攻を創設。主な著書に『異化する時
間』(晶文社)、『二〇世紀演劇』の精神史 収容所
のチェーホフ(晶文社)、『現代演劇の起源』(れん
が書房新社)等がある。二〇〇八年四月より「演劇
ひとり集団・モヒカン族、あるいは、「ラスト・タ

イクーン」を立ち上げている。

結秀実（すが・ひでみ）

一九四九年新潟生まれ。文芸評論家。本誌編集委員。『日本読書新聞』編集長、日本ジャーナリスト専門学校講師などをへて、近畿大学国際人文科学研究所教員。著書に『帝国』の文学（以文社）、『革命的な、あまりに革命的な』（作品社）、『1968年』（ちくま新書）など。共編著に『ネオリベ化する公共圏』（明石書店）など。近刊に『吉本隆明の時代』（作品社）、『増補新版・詩的モダニティの舞台』（論創社）がある。

鶴岡哲（うかい・さとし）

一九五五年東京生まれ。フランス文学・思想。一橋大学大学院言語社会研究科教員。著書に『抵抗への招待』（みすず書房）、『償いのアルケオロジー』（河出書房新社）、『応答する力』（青土社）、『主権のかなたで』（岩波書店）など。訳書にジャック・デリダ『他の岬』（共訳、みすず書房）、『首者の記憶』（みすず書房）、『友愛のポリテイクス』（共訳、みすず書房）、ジャン・ジュネ『恋する虜』（共訳、人文書院）、『アルベルト・ジャコモッティのアトリエ』（現代企画室）など。

米谷匡史（よねたに・まさふみ）

一九六七年生まれ。社会思想史・日本思想史。東京外国語大学外国語学部総合文化講座教員。著書に『アジア／日本』（岩波書店・思考のフロンティア）、編著に『尾崎秀実時評集』（平凡社・東洋文庫）、『谷

川雁セレクトション』（全二冊、岩崎稔と共編、日本経済評論社、近刊）、共著に『沖繩／暴力論』（西谷修・仲里効編、未来社）など。

青柳宏幸（あおやぎ・ひろゆき）

一九七六年生まれ。教育思想史。中央大学大学院博士後期過程在学中。共著に『教育の臨界 教育的理性批判』（情況出版）がある。

べべ長谷川（べべ・はせがわ）

一九六六年埼玉生まれ。卒論として「アルチュセー」ル論」を書き、早稲田大学第二文学部を卒業後、就職せずそのままフリーターに。気がつけば、だめ連？／住みよい東京を考える会／かくめいせい／かつかつ研究所。

ふとらのぶゆき（太等信行）

一九四八年岐阜生まれ。DTPオペレーター。東京学芸大学卒業後、けやき印刷に入社。『救援』『労働情報』『解放新聞（都連版）』などの組版・制作に携わる。一九九〇年にフリーランスとなり、字幕書体のフォント化を目指すうちに字幕関係者との交流が始まり、『字幕文化 光の文字の来歴』を執筆中。

石川義正（いしかわ・よしまさ）

一九六六年東京生まれ。文学・映画批評。編集プロダクション経営のかたわら評論・コラム等を執筆。論文に「リアリズムという信仰 ゴダール『映画史』をめぐって」（述1 近畿大学国際人文科学研究所紀要1）。ブログ「退屈帝国 neo2」<http://tn2.org>（ヤ

ンガ家・月野定規と共同運営）。

千坂恭二（ちさか・きょうじ）

一九五〇年大阪生まれ。思想史。著書『歴史からの黙示』（田畑書店）、共著『ドイツ・ニューシネマを読む』（フィルムアート社）、論文に「総破壊の使徒バクーニン」「ニーチェ、悲劇の誕生とリアドネ」「シュティルナーと物象化論」「シェーンベルクとファシズム」「エルンスト・ユンガーの体験」「蓮田善明・三島由紀夫と現代の系譜」など。

クリスティン・ロス（Kristin Ross）

一九世紀・二〇世紀フランスの文学と文化。ニューヨーク大学比較文学部教授。著書に『The Emergence of Social Space: Rimbaud and the Paris Commune』（U. of Minnesota P）、『Fast Cars, Clean Bodies: Decolonization and the Reordering of French Culture』（MIT P）があり、今回その第四章を訳出した『May 68 and Its Aftermath』（U. of Chicago P）は単著としては三冊目に当たる。数多くのフランス語文献の英訳もある。

内野儀（うちの・ただし）

一九五七年京都市生まれ。日米現代演劇・パフォーマンス研究。東京大学大学院総合文化研究科教授。著書に『メロドラマの逆襲（私演劇）の八〇年代』（勁草書房）、『メロドラマからパフォーマンスへ——二〇世紀アメリカ演劇論』（東京大学出版会）、『知の劇場、演劇の知』（共著、ベリかん社）他。一九九八年からパフォーマンス研究の学術誌『DTR』（MIT Press）のContributing Editor。